

現代社会を捉える視点としての歴史授業の在り方

メタデータ	言語: ja 出版者: 福井大学総合教職開発本部 公開日: 2024-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/0002000231

現代社会を捉える視点としての歴史授業の在り方

福井県立高志中学校・教諭 小川 駿也

要旨

新型コロナウイルス感染症の拡大、ロシアによるウクライナ侵攻など、私たちを取り巻く現代社会は情報化や国際化の進展により、即時的で急激な変化を伴っている。このようなVUCAの時代に生きる私たちにとって過去の人々の生き様や出来事を学ぶことは、これからをどう生きるのかということについて、さまざまな示唆を与えてくれる。そこで、中学校社会科歴史的分野、特に近現代史の授業においては、私たちが生きる現代社会やこれからの将来にかかわって単元を貫く学習課題を設定し、その解決に向けて他者とともに協働探究活動に取り組むことで、生徒の現代社会に対する見方・考え方を育むことを企図した。本実践では、78年前の日本への原子爆弾投下やロシアによるウクライナ侵攻の現実から、学習課題「二度と戦争を起ささないために、これからの日本に必要な考え方や役割は何か」を設定し、この課題に対する自分自身の考えを第二次世界大戦の学習を通して追究した記録をもとに考察していく。

キーワード：現代社会を捉える視点 歴史授業 学習課題

1. 授業実践の背景

本授業実践で取り扱うのは、第二次世界大戦である。第一次世界大戦の反省から、アメリカ大統領ウィルソンの十四か条の平和原則に基づき、民族自決の考え方によるヨーロッパ諸国の独立やアジアの民族運動の展開、国際平和機関である国際連盟の設立を経て、国際協調の時代と言われた1920年代。しかし、世界経済を先導するアメリカ初の世界恐慌の影響で各国が対策を取る中で、自民族や自国中心主義的な考え方が広がり、日本・ドイツ・イタリアの枢軸国はブロック経済圏の確立に向けた植民地獲得に乗り出し、国際連盟の脱退を経て国際的に孤立し、戦争へと向かっていくことになる。日本は日中戦争や太平洋戦争を勃発させ、大東亜共栄圏の確立を目指して東アジアや東南アジア諸国への侵略を正当化し、戦線を拡大していった。その後、アメリカとのミッドウェー海戦の敗戦により戦線は縮小し、本土決戦、そして広島・長崎への原子爆弾の投下を経て、終戦に至る。

戦後78年となる今年5月には、G7広島サミットが開催され、核保有国を含む各国のリーダーが広島平和記念資料館を訪問し、唯一の被爆国である日本は国際社会に平和へのメッセージを発信した。また、2022年に勃発したロシアによるウクライナ侵攻は継続中であり、戦争と平和は現代社会を生きる私たちにとって、これからの日本を創る中学生にとって身近で重要な課題である。このことから、本授業実践では、生徒が第二次世界大戦の学習を通して、戦争と平和についての考えを深めるきっかけとすることを企図し、学習課題「二度と戦争を起ささないために、これからの日本に必要な考え方や役割は何か」を設定し、その解決に向けた活動に取り組む

ようにデザインを行った。

2. 授業実践の実際

(学習課題「二度と戦争を起ささないために、これからの日本に必要な考え方や役割は何か」)

2-1. 広島への原子爆弾の投下から、「戦争」について考える (第1時・第2時)

授業の冒頭、教師から「最近の新聞に『今年は～から78年』という記事があった。知っているかな」という話をすると、ある生徒から「沖縄戦」という発言があった。教師から「1945年8月6日、広島に史上初めて原子爆弾が投下された」と話し、原子爆弾投下が検討されたポツダム会談や広島平和記念資料館内の原子爆弾投下の再現CG映像、熱風や放射線などの原子爆弾の被害についてGoogleスライドで説明をした。途中、悲惨な状況からか目を背ける生徒もいたが、真剣な目でスライドを見て、説明を聞いている様子だった。以前、第一次世界大戦について学習した際にロシアによるウクライナ侵攻の映像を見ているので、原子爆弾投下から78年が経とうとする今も、戦争が起きている現実と結び付けて考えているようだった。

教師から広島への原子爆弾投下の状況を説明した後、戦争について考えたことをワークシートに記入し、生活班、学級全体で共有した。生徒からは「戦争や核兵器の使用によって多くの犠牲が出た」、「核兵器を使用せざるを得なかった第二次世界大戦の状況の悲惨さ」、「戦争に依らない問題解決の方法を考えるべき」などの考えが出された。その上で、広島平和記念資料館を訪問し

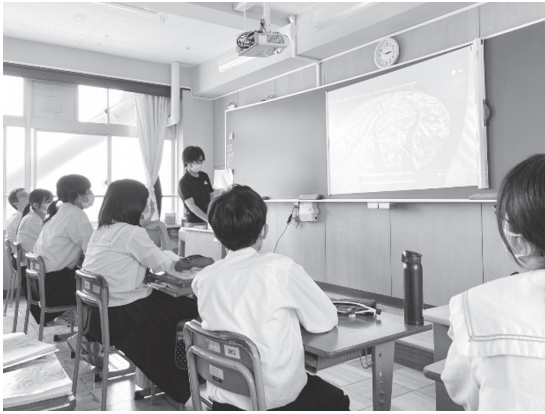


写真1 広島への原子爆弾の投下についての説明

たALTのネイト先生に広島への原子爆弾の投下がどう映ったのか写真を交えながら話してもらった。ネイト先生の話は「原子爆弾の投下によって長期的な影響が出たことが分かった」、「原子爆弾の投下の犠牲になった人々、生存者の苦しみを如実に理解することができた」、「二度と原子爆弾の投下を引き起こしてはならない」という趣旨だった。



写真2 広島平和記念資料館について話す、ネイト先生

I could realize the serious long-term effects of an atomic bomb. The museum has personal items left by the victims, and the photos really show the horror of the event.

This museum is very disturbing, but it serves as a powerful reminder that we must never let something like this happen again.

生徒はネイト先生の話真剣な表情で聞いているようだった。多くの生徒は広島平和記念資料館を訪問したことはないようだったが、改めて、戦争や原子爆弾投下の悲惨さについて考えているようだった。

ネイト先生に続いて、教師から「広島に原子爆弾が投下されて78年が経過したが、世界には9つの核保有国がある。また、5月のG7サミットでは、イギリス、フランス、アメリカの核保有国のリーダーが広島平和記念

資料館を訪問した。日本は唯一の被爆国であり、「核のない世界」を国際社会に訴えているが、同盟国アメリカの『核の傘』によって守られているという側面もある」という話をした。

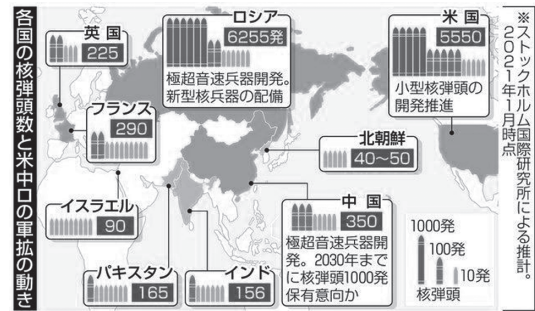


図1 各国の核弾頭数と米中口の軍拡の動き
出典：中日新聞（2022）

そして、教師から生徒に「二度と戦争を引き起こさないために、日本に必要な考え方や役割は何だろうか」と発問し、自分の考えをワークシートに記入し、生活班、学級全体で共有した。



写真3 二度と戦争を引き起こさないために、日本に必要な考え方や役割についての話し合い

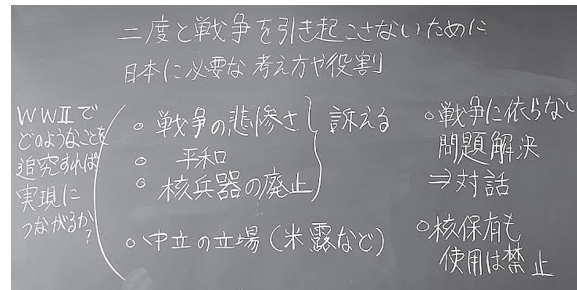


写真4 学級全体で共有した日本に必要な考え方や役割

生徒からは二度と戦争を引き起こさないために、日本に必要な考え方や役割として、「戦争や核兵器の悲惨さ、平和を（国際社会に）訴える」、「各国の中立な立場をとる」、「戦争に依らない対話による問題解決」が挙げられた。前時、戦争について考えたことを、再度、提言している内容だった。そこで教師から「これから第二次世界大戦を学ぶにあたり、どのようなことが分かれば、二度と戦争を起こさないために、日本に必要な考え方や役割を実現することにつながるのだろうか」と発問し、生活班で第二次世界大戦を学ぶ中で検証する問いについて考え、学級全体で共有した。

生徒からは「戦争の悲惨さを訴えるためには、なぜ戦争が始まったのか、当時の各国の関係など戦争に至った

経緯は何だったのか、どれくらいの犠牲を伴ったのかを知る必要がある」、「核兵器の廃止を訴えるためには、核兵器の開発の背景や使用に至った経緯、その被害について知る必要がある」などの考えが出された。



写真5 第二次世界大戦を学ぶ中で検証したい問いを発表

2.2. 二度と戦争を引き起こさないために、日本に必要な考え方や役割の実現に向けて、第二次世界大戦を検証する（第3時～第5時）

前時、生徒が考えた二度と戦争を引き起こさないために、日本に必要な考え方や役割を実現するために第二次世界大戦で検証する問いを集約して提示した。そして、教師から「これらについて、第二次世界大戦を学ぶ中で問いを検証し、二度と戦争を引き起こさないために、日本に必要な考え方や役割を具体化していこう」と呼びかけ、まずは日中戦争に至った経緯と戦争勃発後の経過について、生活班で資料をもとに調査することにした。

学習課題「二度と戦争を引き起こさないために、これからの日本に必要な考え方や役割とは何か」				
戦争の悲惨さを訴える	平和を訴える	核兵器の廃止を訴える	中立の立場	対話など戦争に依らない問題解決
戦争のきっかけ	なぜ長期化したのか	核開発のきっかけ	戦争前の各国の関係性	対話など戦争に依らない問題解決
戦争終結の理由	使用された兵器	核兵器の使用理由	(なぜ関係が悪化したのか)	
戦争の被害		核の被害		

第二次世界大戦で検証する問い

図2 第二次世界大戦で検証する問い



写真6 日中戦争の経緯や戦争勃発後の経過の説明

日中戦争についての調査の中である生徒は、「日中戦争では、満州を直接支配下に置くために、軍閥の張作霖の爆殺や柳条湖事件から満州事変という軍事行動に出た。このような一方的な行動が国際社会から批判され、国際連盟の脱退につながった」と考察していた。自国の利権を優先し、他国の権益を侵害する行動は国際社会から非難され、その結果、その国の国際的な孤立を招き、戦争へと向かわせることにつながることを示唆しているように感じた。

前時に生徒から出された学習課題「二度と戦争を起こさないために、これからの日本に必要な考え方や役割とは何か」についての①「戦争の悲惨さを訴える」、②「平和を訴える」、③「核兵器の廃止を訴える」、④「中立の立場」、⑤「対話による問題解決」の考え方の中から、自分が最も大切だと考えるものを1つ選択した。その上で、その考え方を実現するために、第二次世界大戦についてどのようなことを知る必要があるかを考え、各自が第二次世界大戦で追究する問いを設定した。

その後、上記の①～⑤の考え方の中で、自分と同じ考え方を持つ人同士でグループを組み、第二次世界大戦勃発に至った経緯やその経過について資料をもとに調べ、問いを検証することにした。



写真7 第二次世界大戦で検証する問いの説明

「核兵器の悲惨さを訴える」グループでは、「アメリカが日本に原子爆弾を投下した理由」について調べていく中で、「ドイツのアインシュタインが原子爆弾の技術を開発したにもかかわらず、アメリカに技術提供せざるを得なかった」ことに注目し、「当時のドイツにはアメリカのB29のような巨大爆撃機が存在せず、理論的に無理だと考えられており、また、当時の戦況からドイツの原子爆弾開発は無理だと想定されていた」ことを突き止めた。このように、学習課題に対して最も大切であるとした考えを実現するために、第二次世界大戦で追究した問いを根拠にポスターにまとめた。

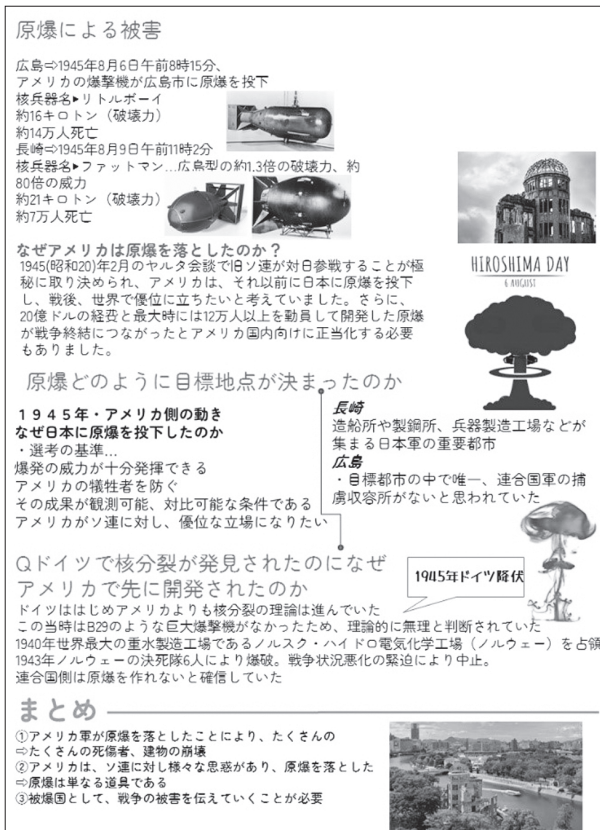


図3 学習課題に対して、第二次世界大戦で追究した問いをまとめたポスター

2.3. 二度と戦争を引き起こさないために、日本に必要な考えについて、グループで考察し発表する (第6時・第7時)

学習課題をさまざまな視点で捉えたり、考えを深めたりするために、グループで作成したポスターを使ってポスターセッションを行うことにした。ポスターセッションに向けて、教師がグループに作成したポスターを縮小コピーしたものとポスターサイズのを配付し、発表の流れを確認したり、グループをさらに2つに分け、一方の小グループに対して発表練習を行ったりした。



写真8 ポスター発表のリハーサル

ポスター発表は、発表練習同様、各グループを2つの小グループに分けて、1小グループあたり質疑応答を含

めて1タームを6分間とし、タームごとに発表者と聴き手を入れ替えながら、計4タームで行った。発表者は作成したポスターを拡大印刷したのを見せながら説明を行い、聴き手はワークシートにメモを取ったり、発表内容に対して質問をしたりして、さまざまな視点から第二次世界大戦の教訓をこれからの日本にどのように活かすのかを考えていた。

「中立の立場」からポスター発表を行ったある生徒は、第二次世界大戦における戦勝国(連合国)、敗戦国(枢軸国)、そして中立国の国民全体に占める犠牲者の割合を算出し、戦勝国や敗戦国よりも中立国の方が犠牲者の割合が高いことを明らかにしていた。これに対して聴き手の生徒は「ポーランドやソ連の犠牲者の割合が他国よりも多いのはなぜか」と質問していた。これに対して発表者の生徒は「ドイツがポーランドに侵攻したことから第二次世界大戦が始まっており、枢軸国と連合国の両勢力の板挟みとなって多くの犠牲者を出した中立国があった」と説明していた。

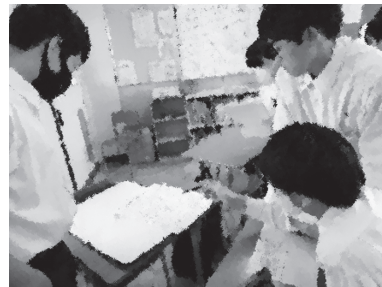


写真9 第二次世界大戦のポスター発表

ポスター発表後、今回の学習の振り返りとして、Google フォームに学習課題「二度と戦争を起こさないために、これからの日本に必要な考え方や役割は何か」について、自分の考えを入力した。学習課題を設定した当初、「対話による問題解決」が最も大切だと考えていたある生徒は、ポスターセッションを終えて、その考えを「戦争の悲惨さを訴える」に変更していた。その理由としては、「最も現実的な手段で、国民一人ひとりを取り組むことができるから」というもので、「戦後処理を少しでも有利に進めたいという思惑からポツダム宣言をすぐに受諾しなかったことにより、多くの国民の命が失われた」と述べていた。

生徒は今回の学習を通して、国民一人ひとりが第二次世界大戦のもたらした影響について理解し、二度とこの

ような戦争を引き起こさないための行動を起こしていくことが、これからの日本に必要なことを実感しているようだった。教師から「第二次世界大戦を学習し、一人ひとりの学習課題に対する考えを、これから訪れる78回目の8月6日、9日、15日にさらに深めてほしい」と話した。

授業後、生徒の学習課題に対する考えを深めたり、他学年が戦争と平和について考えるきっかけとなったりすることを意図し、作成したポスターを廊下に掲示し、本実践を終えた。



写真10 ポスターを掲示し、第二次世界大戦の学習過程や考察を広げる

3. 現代社会を捉える視点としての歴史授業の在り方(授業実践を振り返って)

ロシアによるウクライナ侵攻の背景には、両国が中世のキエフ・ルーシを母体として民族や宗教を同一にしていたこと、そしてその同一意識が招くウクライナのNATO加盟やEUとの連携に対するロシアの抵抗感などがあった。1年半以上続く(原稿執筆当時)この戦争の影響は、物価上昇や日本へのウクライナ避難民の存在など、私たちの生活にも影響を与え、これからの日本がどのような考え方や役割を果たすのかということは、自分たちの将来にもかかわっている「現実」である。また、5月に行われたG7広島サミットで核兵器保有国3か国を含む各国首脳が被爆地広島での平和祈念資料館を訪れた

ことは、唯一の被爆国である日本の考え方や役割について国際社会に大きなメッセージを与えた出来事だったのではないだろうか。

今回、現代社会を捉える視点としての歴史授業の在り方と題して授業実践に取り組んだが、上述のような私たちを取り巻く「現実」の背景には歴史が存在しており、現代社会の諸課題を解決する糸口としても歴史から学ぶことが重要であると考えた。本授業実践の中で生徒は、学習課題「二度と戦争を起こさないために、これからの日本に必要な考え方や役割は何か」に対する自分の考えを明らかにし、その考えを実現するために第二次世界大戦について知る必要があることを追究した。また、学習課題に対する考えを異にする生徒同士のポスターセッションを通して、自分の考えを深めることができた。生徒が生きる現実、そしてこれからの将来を捉える視点としてこそ、歴史を学ぶ価値があると考えた。これからも、このような視点で学習課題、単元デザインを考え、実践を積み重ねていきたい。

参考文献

- 矢ヶ崎典隆、坂上康俊、谷口将紀(2020)『新しい社会歴史』東京書籍
- 浜島晃(2018)『つながる歴史』浜島書店
- 福井新聞(2022)『「誰も助けにこない」福井在住ウクライナ人女性の悲痛な声 ロシア軍侵攻、母国の過酷な状況語る』<https://www.fukushima.co.jp/articles/-/1501267>
- 社会科教育編集部(2023)『教育科学社会科教育2月号』明治図書出版株式会社
- 首相官邸(2023)『G7広島サミット議長国記者会見』https://www.kantei.go.jp/jp/101_kishida/statement/2023/0521kaiken.html
- 広島平和記念資料館HP <https://hpmmuseum.jp/>
- 中日新聞(2022)『「核軍縮へ具体的行動を」非保有国・NGO、五大国共同声明に』<https://www.chunichi.co.jp/article/395057>

How history classes should be as a perspective for capturing modern society?

Fukui Prefectural Koshi Junior High School Shunya OGAWA

Keywords : Perspectives on modern society History class Learning assignment